



博士（人間科学）学位論文 概要書

乳幼児期の自閉症に関する研究

2002年1月

早稲田大学大学院人間科学研究科

伊藤英夫

自閉症児を早期発見・早期診断をし、乳幼児期の自閉症児の発達過程を調べるために、次のような研究を行った。

「我が国における早期スクリーニングシステムとそのフォロー体制に関する全国調査」では、全国の各都道府県から、人口規模別に132市を抽出し、1歳6ヵ月児健診の実施方法とフォロー体制に関するアンケート調査を行った。その結果、健診のシステムや健診の項目はどこもほぼ同じ水準で、言語・精神発達に関する検査等もほとんどの市で実施されていた。しかしその内容、実施方法についてはばらつきがあり、人口の少ない市ほど心理職の参加率が低く、保健婦が仕事をカバーしている結果となっていた。特に、健診の際のスクリーニング基準と、スクリーニングの精度が重要であることが明らかになった。次に、「自閉症児の早期スクリーニングシステムの開発」では、1歳6ヵ月児健診において、自閉症を含む発達障害児のための1次スクリーニング用アンケートの開発を行い、指さし、言語、模倣のカテゴリーが重要な項目であることが分かった。また、言語・発達に遅れのある子どもは、14項目中3項目以上の未通過項目があり、発達障害のリスク児のスクリーニングの基準を3項目以上と考えることができた。8名の発達障害児についてみると、予後の良い子どもは未通過項目数が少なく、重度になるほど未通過項目数が多い傾向にあった。2名の自閉症児に共通の未通過項目から、指さし、言語、模倣、母子関係に関連した項目が重要であることが示唆された。次に「自閉症児の早期徴候と早期診断」では、23項目のチェックリストを作成し、1歳6ヵ月児健診ですクリーニングされた発達障害のリスク児38名に対して実施した。その結果、後に自閉症と診断された18名と精

神発達遅滞児と診断された11名で比較すると、表情に乏しい、視線が合いにくい、動作模倣がない、身振り表現がない、理解言語がない、疎通性に乏しい、高い所によく登る、機械類が好き、奇妙な行動をする、絶えず動きまわるの10項目に有意差がみられた。また、指さしやジョイントアテンションは、1歳6ヵ月から2歳までの時点では、まだリスク児のほぼ全員が未獲得の状態で、早期診断のための有効な指標とはいえないことが明らかになった。次に抽出された自閉症のリスク児について、早期発達に関する縦断的研究を行った。「自閉症児の母子関係」では、Ainsworthのストレンジ・シチュエーションを用いて対人行動の観察が行われた。その結果、自閉症児は他の障害児に比べてアタッチメントの成立が遅れるものの、アタッチメント行動が認められた。しかし、26ヵ月の観察場面では遊具や環境物に没頭しているとアタッチメント行動を示さない場合が多く、観察場面の変化に対する認知も悪いことなどから、認知発達の特異性が示唆された。また、家庭ではアタッチメント行動を出現させている自閉症児が、観察場面では全く示さない傾向が半数以上あり、健常児のアタッチメントと質的に異なることを示唆していた。一方、他者への対人行動は、アタッチメントの成立過程とは逆に、より希薄になっていく過程が明らかにされた。「自閉症児の指さしの発達」では、1歳6ヶ月から3歳6ヶ月までの2年間の指さしの発達について観察を行った。その結果、自閉症児と中・重度発達遅滞児は他に比べて指さしの獲得率が低く、獲得時期も遅く、指さしの種類も少なかった。しかし、ほとんどの自閉症児は要求の指さしはを示したが、叙述、共感の指さしは全く認められないという点が他の障害児と異なる

る特徴であった。また、指さしの獲得と表出言語の獲得とのいわゆる逆転現象については、自閉症児特有の問題ではなく、他の障害児にも高率に認められた。しかし自閉症児の場合、先行する言語獲得からかなり遅れて指さしが出現する傾向が強く、その内容も他者へ伝達する意図のない独語、非伝達の指さしが多いと考えられる。このように、自閉症児の指さしの発達は、対人関係の発達との関連で考察する必要があり、これまでの対物認知を中心とした感覚運動機能の発達との関連のみでは、その特徴が捉えきれないことが示唆された。